

---

講 義

---

# 人間形成と教育

矢 口 新

---

## 1. 能力開発と教育観

### 永遠の課題・能力開発

歴史とか時代の移りかわりとかというものはふしぎなものである。一つの言葉を改めて考え直させるというような力をもっているものであるらしい。能力開発などということが言われだしてきたが、そういうことが過去に考えられていなかったかということはない。その証拠にこれまでの教育は能力を開発することを考えていなかった、などという教育者からきついおしかりを受けるであろう。いつの時代に、人間の能力をのばすことを考えないで教育をやってきたであろうか。江戸時代であろうが、明治時代であろうが、大正時代であろうが、能力を開発することを考えてきたのである。それにもかかわらず、今改めてこういうことを言い出すのは、考えてみるとふしぎなことである。

しかし現在、能力開発というようなことが特に言われなければならないのは、過去の時代において、その言葉が使われ位置づいて来たのとちがったものがあるからなのである。何かちがったことを指示しようとしているのである。それは何であるかを探し求めることがさし当たってたいせつなことなのである。それはただ言葉としての能力を定義するなどということとはちがうのである。その言葉で現代が指示しようとしているものは何かということなのである。

言葉というものは、いつも内容がはっきりしているとは限らない。一体何をさしているのかわからないことが多い。能力という言葉もそうであろう。人は勝手にそれはこうだときめることはできる。しかし人によってそれが違うのである。だから多くの人が物を言えば言うほど、ますます混乱してくることもなるのである。それでは何もならないかのごとくであるが、しかもそうとも限らない。それもやがてまたある所へまとまっていくのである。それはどうしてかということ、実践というのがそれをきめてくるのである。さまざまな考え方にもとづいて、さまざまな実践が行なわれる。そのさまざまな実践の中からあるものが残り、あるものは消えて行く。そうして残ったものがその言葉を独占する資格をとるのである。能力開発などということも最後にはそうして、おさまる所へおさまるのである。そうしてある時代の動きが終わる。そうするとまた次の

時代が始まるのであろう。その意味では、能力とは何かなどという問は永遠になくならない問だといえよう。

私は能力とか、学力とか、あるいはもう少し幅広くして才能とかいろいろな言葉で言われているものを、あまり厳密に言葉の上で定義するという立場をとらない。少し乱暴な言い方をすればどうでもよいことだと考えている。しかしそうかといって、全然でたらめでよいとは考えていない。常識の所で出発すればよいということである。今この論もそこから進めよう。必要に応じて多少ずつ限定をしていくことになるかも知れない。それは現実の問題を考える必要に応じてということである。

能力を開発しなくてはならないと言われだしたが、過去においてもそうだったのに、どうして特にまたそう言われるようになったのであろうか。現在の教育が能力の開発という点からみて、どこかに欠陥があるのであろうか。そうでなければそういうことが特に言われだす必要はないと思う。

さてここで、私は学生時代に教育学を勉強しはじめに、エデュケートというのは引き出すということだ、能力をのばすことであって押しつけることではないのだということ、いつもいつも言われたのを思い出す。近代の教育学はどれもみなそういう考え方をとっているから、われわれの現在もっている教育は、そういう根本的な思想をもとにして成り立っていると考えてよいのであろう。つまり能力を開発するという考え方は、現代の教育の根本的な性格であるはずだということになる。

やっていることと考えていることは必ずしも一致しないのはわれわれの常であるから、問題があるとすればどうもその辺であらう。現代われわれのものとなっている教育の体系というか組織構造というか、それが必ずしも能力を開発するというようなものとなっていないのではないか。考え方と実践との間に、気のつかない隔りがあるのではないか。

### 教育目標観の問題 — わかるとできる

そういう点で私がもっとも問題点だと思うのは、現代の教育の目標観である。現代教育の目標で中心をしめるのは、理解ということである。何といっても理解させるということは教育の中心の目標になっている。理解の道を通じて態度を養うし、技能を養うというようになっている。もちろんそうでない途もあるが、理解ということが現代の教育において占める位置、比重は大へんに重いのである。

これをもっとひらたくいえば、わかるということであり、教師の側から言えばわからせてやるということである。ごく常識的にどうしてわからせてやるかというような言い方をして、教育のことをいろいろと考えているのである。それが日常の実践となつてあらわれて来るのである。このことが、教育が本当に能力を開発することにならない、大きい原因ではないだろうか、と言っては結論が早すぎるが、これには多少の説明が必要である。

「わかったか、よくおぼえておけ」というのは教師のよく使う言葉であるが、この言葉にあらわれているのは、わかるというのは教師の説明を聞いてわかったということなのである。わかったことはよくおぼえておけと言われているのであるが、どうしたらよくおぼえられるのかは教師

は教えてくれない。おぼえることを命令されるのである、命令と言って悪ければ勧告されるのであるが、さてどうしたらおぼえられるのか、おぼえますと言ったからといって、おぼえられるものではない。おぼえるつもりでも忘れてしまうのである。その所は教師の責任でなく、学習者の責任なのであろうか。

学習者が一度教師に聞いてわかったことを忘れないようにしようとするためには、多分あとでくりかえし反復してみる必要があるであろう。そうして自分だけで教師が説明した筋を語ることができるようになったらそれはもう忘れないであろう。その所に学習者の能力が開発される秘密があるのである。つまり教師がわかったかと問を出すまでのその前の説明の段階は、あまり生徒にとっては役に立たないのである。言いかえれば、教師が手とり足とりして、やっと生徒を歩かせたという段階である。それを1回やってやっと歩けたというのが、わかったという状態なのである。それであとおぼえておくと放り出してしまうのは、いちばんたいせつな所を何もしないのと同じである。一度歩いてみて歩けたら、今度は教師の援助なしにひとりで歩けるように努力する所にいちばんたいせつな能力の開発があるのである。自分で歩ける能力をつけてやるのが教育のいちばんたいせつな仕事なのである。それをやらないのは、教育は「わかればよい」のだという考え方が、いつの間にやら身につけてしまっているからである。

わかるでなくて、できるようにしてやるのが教育だということを、一度はしっかりと確認しなくてはいけないのではないか。

### 人間観・能力観のあやまり

わからせる教育という考え方は、人間の能力を考える意識をいつの間にか失わせてしまっている。学習者ができるように力をつけるという所に、教育のたいせつな仕事があることを忘れさせてしまっている。

教育は外から与えるものになる。教師はわかっていることを説明することに浮身をやつす。そうしてわかったか、わかったらおぼえておくとくりかえすだけなのである。そこから先にたいへん努力が必要であるし、時間もかかるのであるが、それは学習者にまかせられるから、教師の関係することではないかのごとき錯覚をもつにいたる。そういう体系で教育が考えられると、教えることがいくらでもどんどんふくれあがる。教育の内容は無限にふくれてくる。あれもこれもとわからせようとする。実はわかったと思わせるだけなのである。本当に自分でひとり歩きできるようになったのではない。ただその時の授業でわかったと思わせるだけでよいことになる。それが教育内容を知らず知らずのうちに過剰にしていく。学習者はそれにおしつぶされそうになってくる。教育内容は過密になって、もうどうにもならない。これでどうして人間が能力を開発することになるか。人間は過剰ないわゆる知識というものを、なんとかか頭といういれものの中に入れてようと努力するのである。それはしかし、食べものをろくにかまないのみこんでしまうようなもので、不消化のまま通過するだけである。

わかったかわからないかをテストする試験があるけれども、これも本当に学習者ができるようになっているかどうかをみるものにはなっていない。一学期に2回くらいテストがあると、それに合わせて学習者は、不消化なものを暗記するのである。そうして試験が終われば忘れるのであ

る。それでよいことになっている。その中から幾らかは残っていくものがあるというのが今の教育である。

今のような教育だと、人間の能力というのは、いれものの大きさのようなものと考えられているといってもよい。それも試験のときどれだけ入っているかというだけのことである。それは生まれつき大体きままっているのであって、能力のあるものはよくおぼえている、能力のないものはおぼえていないということになる。できる人間、できない人間などというが、それは試験ができるということであって、本当にできるということを問題にしているのではない。

特に学習者をできるようにしてやるという考え方がないのである。教師は自分の知っていることを説明する。能力のあるものはそれについてくるし、能力のないのはそれについてこないのだと考える。

こうして能力というものも、開発すべきものという考え方では考えられなくなってしまっている。能力のあるなしははじめからきまっていて、教師は教育するときは能力のある人間を教育したいと考えるようになる。能力の低いものは教育しないでよいというように考えるのである。恐るべき人間観である。非人間的な考え方が教師の中に知らず知らず生まれてきているのである。

## 正しい能力観

能力というのは、どれだけ頭を働かすかによってきまってくるのである。いま、あることに能力が低いというのは、そういう訓練を過去に受けなかったからで、つまり頭を働かさなかったからなのである。教師はあれだけ教えてやったのに、できないのは能力が低いからだなどという言い方をする。それは教えたかもしれないが、できるようにすることをしなかったのである。わかったと思わせたにすぎないのである。わかったと思うなどということは、ピンからキリまでである。長い話のちよとした所がわかってわかったであり、段階はさまざまである。それはあてにならない。実際に自分でやってみてはじめて本当にわかるのである。やってみるとひとりひとりみんなちがったスピードをもっているのである。早くやるものもおれば、ゆっくりやるものもある。それはまたやることに関して、過去にどれだけのことをやったことがあるかということと関係するのである。つまり能力というのは過去にやったことの函数と考えたらよい。ただ話を聞かせてわかったと思わせるということは、能力をのばしたことになるのでない。遊ばせていたことにしかならないというべきであろう。

やらせればやらせるほど能力はのびるのである。いかにして頭を働かせるか、わきからの助けなしで自分で歩けるようにするか、それが能力をのばすについていちばん考えられなければならぬことである。それはわからせることでなく、わからせたことを、自分でできるようにするまで、どうもっていくかを考えることになる。はじめは多くのヒント、援助を与えてわかるであろう。それをヒントなしで援助なしでできるようにする所まで教育するのが能力の開発である。

こう考えてくると、現代の教育は能力の開発をするという考え方が乏しいということは、間違いないことのようにである。そうしてそれがさまざまな所に悪い影響を及ぼしている。教育における非人間的な考え方がでてくるのも、これと関係があるのである。教育内容が過密になって、人間をむやみに圧迫するのも、本質的に教育の仕事である人間能力の開発ということを忘れてい

からである。受験準備の教育というような怪しげなものが横行するのも、やはり人間能力の開発を忘れてからである。そういうことが、やがて大きな復しゅうをうけることになることを忘れてはならない。さらに新しい技術革新の時代に生きる人間の教育という要請からも、これまでのような考え方では失格ということになるであろう。

## 2. 教育と自己啓発

### 教育の本質

教育とは本来自己啓発が本質である。しかしこのことには説明が必要である。われわれ日本人のもっている教育観は、それとは極めて縁が遠いからなかなか理解できないであろう。

われわれが教育という言葉を使う時、頭に思い浮べるのは恐らく学校の教室で教師が学級の生徒に対して教育をしている姿であろう。これは恐らく殆んどすべての人が思い浮べる姿であろうが、子供の頃から何十年という教育を受けた共通の姿であると思われる。その形が教育だと思われる。それが日本人の教育観をつくっている。企業の中で教育をする時もそういう形がとられる。大部分の教育はそういう形で行なわれる。

教育とはそういう形のもを言うのであろうか。その形が教育なのではあるまい。教育を教育たらしめるものは何であろうか。それは被教育者が成長するということであろう。成長という言葉は自然的成長を意味する時もあるから、教育学では“学習”という言葉を使う。この学習という言葉は、常識で言う学習とはちがうのである。常識で学習と言う時、勉強という程の意である。教育学の術語として使うときは、“経験による行動の変容”という意味に使う。つまり勉強した結果、そこに進歩があった時、成長があった時、学習が成立したというのである。行動というのは、この場合、広い意味で、頭脳の働きもまた行動である。考えるというのも行動で、いわば脳の行動なのである。身体的な行動ももとより脳の行動である。それが表にあらわれるか、内面的にかくれているかのちがいであるが、共に脳の行動にちがいない。

教育を受ける者に何等かの行動の変化があった時、教育が行なわれたのだというのは極めてきびしい立場であるが、ものの本質はそう考えるべきであろう。教室で教育をしていると教師が思っている、それが生徒に何等かの行動の変容をもたらさなければ、それは教育をしたことにはならないと言うべきである。この辺の考え方が甘いと、やっていることの意味がなくなってしまふ。

### 自己啓発

ラーニング・バイ・ドゥーイングという言葉がある。日本ではなすことによって学ぶと訳されているが、本当は、“なしたことに応じて学習は成立する”と訳すべきである。学習の成立は、勉強している本人がどれだけなしたかによってきまるということである。

ダンスを学ぶ例をとってみよう。ダンスは先生がおどるのを見ていたのではおぼえられない。

もっとも先生がおどって見せて、どうだわかったかと言えば、生徒は一応わかったと言うであろう。わかるという言葉はいろいろな使い方ができる。この場合わかったというのはおどれるという意味ではない。次にそれでは一度まねをして足を動かしてみろと言えば、床の足型をふんで一通り動かしてみる。それは一回やった位ではおどれるようになりはしない。しかしそれでもどうだわかったかと言えば、やはりわかったと言うであろう。本当はおどれるためには、自分で何回も何回もステップをふんでみなくてはならない。その時は全神経を集中して練習するであろう。そうしてはじめておどれるようになるのである。自分で、おどるということをやらなければ、大脳が足を動かす動かし方を会得しないわけである。

一度ダンスをおぼえてしまうと不思議なことに、次にはどういうステップだなどという神経を使わなくても、ひとりで足は動く。ひとりで動くばかりではない。神経は全く別なことに集中していても、ダンスはできるのである。パートナーと夢中になって話をしながらのしくダンスはできる。もうどのように足を運ぶかなどということについての意識はゼロになっているのである。人間の脳の働きは不思議といえれば不思議である。

これは足を動かすというような身体を動かす行動に例をとったのであるが、足を動かすといっても結局は大脳の働きである。いわゆる考えるということについても、全く同様である。ある考えるという過程を人から聞いたら、それは一応はわかるであろう。しかし自分で考えることができるようになるためには、自分で何回もくりかえし考えてみなくてはならない。その練習をつむと、意識ゼロの状態でも、考えることができる。つまり一瞬にその過程がたどれるのである。そういうものの累積によって、むずかしい事もまた考えることができるようになってくる。

例えば数学の問題を読むとする。読み終わった時に答が出る程度のやさしい問題を考えてみる。その時には文字を使って、またいろいろな言葉を使ってそこに問題が提示されているのを、読む人はスラスラと読んでいる。文字を読んでいるが、それは意識ゼロの状態で一瞬の間に読んでいる。タームが使われて居れば、それも一瞬の間に読んでいる。そういうものの上にその文章によって表現された数学的意味の世界を読みとっているのである。

そういう段階にまで到達するには、そこに文字か語いについてのくりかえしの訓練があったわけである。ダンスと同じように、自分でステップをふんで、くりかえさなくてはならない。

人間の能力が開発されるというのは、結局はラーニング・バイ・ドゥーイングである。学習するもの、教育されるもの自身が、自ら行動し、行動することによって、大脳自体が行動の方式を身につけるのである。刺激に対する反応の仕方を会得するのである。大脳細胞の一つ一つは、真空管と全くおなじであるといわれている。多くの真空管の連合が行動となるのであるが、それがドゥーイングによって洗練されるわけである。細胞の連合するスピードが出ると考えてよい。その反応のスピードも恐らく千分の一秒を単位としてはかる程のものであろう。ダンスが意識ゼロでできるようになっていくのもそういう状態なのであろう。

こう考えると、教育の本質は自己教育であり、自己学習である。教育における主役は教育者でなく、教育されるものである。教育されるものが自ら働かなければ、教育されたことにならない。教育されるものが自ら働くということは、教育されるという意識とはちがう。その逆である。自

らが自らを教育する、自ら学習を成立させるということではなくてはならない。従来の教育では、被教育者はいくつになっても、教育されるという受身の立場に立たされている。そういうように扱われるのである。自ら働く立場におかれぬ。

ところで学習はどのような条件の下に成立するであろうか。人間は真空の中では生きることができないように、人間が人間としての存在となるためには、それをつくりあげる媒介物が必要である。人間は社会生活という媒介を通して人間となるのである。つまり生活の環境が人間を人間存在たらしめるのである。生れ落ちてから彼がふれる一切が彼を育てると考えてよい。彼はそれらのものを通じて己れ自身を生活する人間として育てて行くのである。

われわれが現在行動する一切は、生れ落ちてから身につけたものである。言葉も、二本の脚で歩くのも、すべて環境の中で自ら行動する（考える）ことを通じて会得してきたものである。それをもっと客観的に言えば、主体と環境のダイナミクス、環境と主体の刺戟、反応関係において、主体が形成されて行くということである。

これまで教育において、教育する側の働きが注目されていて、被教育者がとかく受身の立場に立たされていた。教育を受けるという語感がそれである。教育する者は、己れが働くことを考えるべきでなくして、いかにして、生徒を働かせるかに積極的たるべきである。積極性を発揮する位相がこれまで逆立ちしていたのである。

だから環境に対して被教育者が働きかけるようにすることができれば自己学習は成立するのである。教師がある事柄について解説するのでなく、自ら解釈するのである。例えば自然のことについても、社会のことについても、自然はこうだ、社会はこうだ、と教師が結論を与えるのではなく、自ら結論を出すように、自分の力で自然や社会を解釈させるのである。その解釈のプロセスを生徒自身にふませるのである。どういうプロセスをたどるかは、適宜指示を与えてよいだろう。そういう態度で自然や社会に向うことは、自ら自然や社会に働きかける態度を養うことになる。常にそういう態度で自然に向い社会に向うように生徒を仕向けることが、生徒を、自らを高める努力をする人間に育てることになる。

いつも話の結論を聞かされるという状態におかれるのでは、人間は自らを開発する態度をなくすることになる。学校生活十数年の間そういう状態で暮してきて、さらに産業の世界でもまた、人が何かを教えてくれるという状態におかれているのでは、人間は自ら苦難の道をふんで、正しいプロセスをたどって物事の筋道を発見し、解釈するということをしなくなる。その結果はそういう能力を開発しないことになる。わが国の結論をあたえる主義の教育は、手っ取り早いようで大事な積極性を人間の中から奪い去っているといってもよいのである。プロセスこそ大切である。正しい結論を教えるより正しい結論を出す筋道をふむことを体得させなくてはならないのである。自己学習の意義はそこにあるといえよう。

### 3. モラル形成の方式

教育の目標は、ひとりびとりの人間の能力を最大に伸ばすということであり、ひとりびとりを育てるためには、大ぜいのなかで集団として教育しなければならぬこともたくさんあります。われわれは、いつも学級ということのなかに閉ざされて、そのなかで集団だとか個別だとかいっておいましてけれども、そうじゃないんじゃないか。何をどう訓練するかということは、結局はひとりびとりの子どもの訓練をするわけであり、そのために、その子どもをどういうグループに入れるか、ひとりで何をやらせるのか。たとえば自然に向かって自然を克明に究明するというようなときには、自然にひとりで向かっていけばいいじゃないか。人とディスカッションをするというのは、ある事柄について、人の言うことを聞いて、自分の意見を言って、その両者の意見をまとめるという、そういうプロセスのなかに生徒を入れるわけであり、そういう習慣を脳につける、そういう働き方を脳におぼえさせる、そういうことのためにそういうグルーピングをやり、実際にひとりびとりにそれをやらせなければならぬ。ただ学級を何人にするとか分団をつくるのがいいとかわるいとかの問題ではない。場合によったら千人からのグループの中に入れなければならぬ場合もあるわけであり、それらはすべて、頭脳訓練から考え直さなければなりません。脳に対する刺激反応、フィードバック、定着という、そういうことから考え直してこなければいけないのじゃないか、ということが当面の問題になるのじゃないか。

そういう点でも、われわれは従来甘かったのじゃないか。これは私は単に日本でいわゆる知識教育といわれることの方法を申し上げたり、そのことだけを中心にして申し上げているのではないのであります。皆さんが問題にされている青少年の問題、その中心を占める道徳教育の問題についても基本的にはそうである。日本の道徳教育がいつこうだつがあがらないのは、結局、ワンプロセス主義の理解主義の教育をやって、いっぺん話を聞かせて“わかったか、わかったらおぼえておけ”というふうな体系のなかであって、脳が意識ゼロの状況において行動ができるような人間をつくるという考え方がないという形で道徳教育が行なわれているからだと思っております。

それはさまざまな形で行なわれていると思いますけれども、結局せんじつめると、日本では、何か教科書のようなものをつくって与えて読ませて、先生が説明して安心する。一週35時間、それで安心するならば、これは事はやすいわけですが、そういうことで人間の道徳的行動というようなものができるようになるだろうか。それでは脳の道徳的行動が育つとは考えられません。もちろんそれだけだというわけじゃありませんが、せんじつめるとそういうところへきてしまう。道徳的行為というものも、基本的には、さきほど申しましたように、やはりくりかえしによってのみ育っていくものである。脳がそういう習慣をもたなければならぬ、働き方を身につけなければならぬ。ところが、そういう働き方を身につけるということを中心にして道徳教育というものはやられてはおらぬ。むしろ道徳心なんていう、心なんていう、心臓みたいに考えてしまって、何となくばくぜんと、ムードで、ふんい気で話をして、生徒が感激したら、ああ道徳心が養われたなんて考えるけれども、こんなことは、一度話を聞いてわかったような気がするけれども、あとで忘れてしまう。ただことばだけは知っている。人に親切にしろというようなことだけは知っている。しかし、具体的に何が行動として出てくるか、それは全然別なことである。

先生の話がわかるなんていうことが道徳教育じゃないはず。自分がその場に臨んでできる



ということが道徳である。ここに乖離がある。行動と意識とのあいだに乖離ができてきているというのが日本の教育の欠陥だと私は思う。これも基本的には日本の教育観というものに根ざしてそういうものが出てきているのだと思われるのであります。

東京の町は最近掘りかえされていますが、掘りかえされなくても、町を歩いて非常に目だつのは、道の両側に紙くずがいっぱいちらかっているということでもあります。そういう紙くずを捨てるということが平気なんです。さきほどの私のことばを使って言うと、意識ゼロの状態において紙くずを捨てているわけです。道を歩いてはなをかんで紙くずをぽんと捨てている。これは意識ゼロです。ここにすでに道徳というものが存在していない。学校の教室で道をきれいにいたしましょうね、紙くずなんか捨てないようにいたしましょうね、なんて言われたときにはよくわかった。わかったからやらないかという、意識ゼロの状態だと逆にぽんぽん捨てる。たばこを吸いながら歩いてそれをぽんと捨てる。意識ゼロの状態において大脳がそういう行動をやっている。そういうことがざらにある。

電車やバスに乗って、日本人ほど乗り方を心得ていないのではないということ、私は世界じゅう歩いてきて感じます。若い人は若い人なりに、年寄りや年寄りなりに、あるいは女性は女性なりに、バスや電車に乗って、乗ったたびにひとりやふたりそういう人を見ないときがない。たとえば、自分の席の両側を半人分ぐらいあけて腰かけていっこうお感じにならない。右か左へよればもうひとり腰かけられるのに、そんなことは意識にのぼらない。自分の神経は、自分のおしりをどこへもっていくかということだけに集中しているわけです。そしておしりをそこへもっていったら両側はどうなっているかというようなことはいっこうおかまいない。意識ゼロである。そばに立って私がよけないかというような顔をしてながめておっても、いっこうのほほんとしているから、すみませんけれどもと言うとはじめて気がつく。まことに鈍感である。りっぱな紳士が股を広げて両足を開いて、二人分として腰かけている。両ひざをちゃんと合わせて腰をおろしているなんていうのはなかなかいない。現代っ子ばかりじゃない。現代じいもみなそうです。ご婦人でもそうです。そういうことに神経を使わない。まるっきり反対の方向へ神経を使っている。ただ自分のおしりをそこへもっていくことだけに神経を使っている。

それは子どものころからそういうふう育てられたからでありましょう。日本の家庭では、道徳教育といってもこれは学校のやることだと考えている。これがまちがいであります。道徳教育というのは、まず第一に家庭がくりかえしくりかえし子供にやらなければだめだ。行動させることによってそのことを身につけさせなければだめだ。そのうえに観念がだんだん育ってくる。ところが、家庭の人たちはこのごろどうも子どもが悪くなった、学校の教育が悪いなんておっしゃる。このごろもPTAで話をしていました。どうも学校の道徳教育が悪い、このごろも家へお客さんが来たけれども、うちの子どもはおじぎもしないでぼんやり立っている、けしからん、と言うんです。あなたはそれでどうしたかと聞いたら、私は学校のことを憤慨していたという。自分の子どもはどうしたかと聞いたら、ただ黙って見ていたという。なぜそこでお客さんにあいさつするように子どもをしつけないのか、それをやらないで学校の教育が悪いなんて憤慨しているというのは、頭がトンチンカンです。日本の人の考え方はそういうものの考え方です。学校という

もので先生がお説教しなければ子どもはよくなると思っている。そんなばかなことはない。反対です。だいたい先生なんかにかかせるのがまちがっている。先生にそんな資格はありはしない。子どもを毎日毎日扱っているその場でやらなければだめだ。そういうことがいいことだということも子どもに教育しなければいけない。学校の先生はそういうことをもっと自信をもってPTAにおっしゃっていただきたい。まずきびしくするところはその点です。親をきびしくしなければだめです。

私個人のことを申し上げてたいへん恐縮ですが、私は始終こういう所へ来てお話ししております。子どもの教育ということは全然できない。ただ一つ子どもに対してやかましいのは、外へ出たときの態度です。うちで行動するときもそうでありますが、要するに社会的な態度はやかましい。これは徹底的にきびしい。たとえば、トイレへ入ってげたやスリッパを向こう向きにぬいで出る。そういうことだって、子どもに植えつけるのに、私の経験では4年ぐらいかかります。3つくらいから始まって小学校へはいるころやっとそういうくせがつく。どんなにあわてていようが、神経がどこへいっていようが、もうだいじょうぶだ。どこへ行こうがそういう形で行動するようになる。そうなるまでに4年ぐらいかかる。

だれかひとりおいて始終つきっきりでやっておればもっと早いでしょうが、そうはできないから、気がついたときに“おい、スリッパ”と、家じゅうみんなで作るわけですけども、やっとそうなる。そうなってしまうと、もう子どもはすっかり忘れているわけです。ところが、それがどういうときに出てくるかという、どこかよそへ行ったときに出てくる。あるいは家へお客さんが来たときに出てくる。「おとうさん、きょうお客さんが来たろう。あのお客さん社会性がないよ」「どうしてだ」「スリッパこっちへ向いているよ」なんていうことを六年生の子どもが言う。どこかへ行って宿屋へとまったときに、スリッパがみんなこっち向きになっている。「この宿へ泊まっている人、なかなかえらそうな顔しているけれども、みんなわからないんだな」「そうだ、日本人はみんなそうだ」「日本の社会のふんい気が悪いんだな、おとうさん」なんて言う。そういうときに意識というものが出てくる。それはなぜかという、自分がそういうふうで育てられてきて、それはもういいことだか悪いことだか忘れているのですけれども、自分が大事にしてやっている行動に対して、それと違ったものがそこへ出てくると、はてなと考える。そこで、何だということになる。それがいろいろな多くの場合にぶつかると、日本の社会というような意識にもなってくる。

私は、バスや電車に子どもをつれて乗るときに、赤ん坊のときからすわったことがない。どんなにくたびれていても赤ん坊をだいて立っている。そのかわりすわっている人の前になんか行きません。日本人は赤ん坊を抱いて、すわっている人の前へ行ってすわっている人を立たせようという趣味があります。私はそういう趣味がないから端のほうに立っている。また子どもが二つ三つになっても絶対にすわらせない。がらがらのときならすわらせるけれども、お客さんが入っていたら立たせる。立っているほうが血の循環がいいんだ、頭がよくなるんだから立て、からだがじょうぶになるんだから立て、と行って立たせる。日本の親は、子どもをつれて、われわれがすわっている前へ来て、立たぬかといわんばかりの顔をしている。子どもが腰かける腰かけると言うと、親はうんうんなんて言ってだれか立たぬかというような顔をしている。あれがいちばんい

けない。そういうときは、私は自分の前へ来たら、子どもは立っているほうが血の循環がよくなってからだにいいですよと教えることにします。ところが一般に親は自分の子どもに人を立たせるしつけをしているようなものです。人がすわっているのになぜ子どもが立たせる権利があるか。絶対ないはずである。ところが平気でそういう習慣を子どもに育てているわけです。ヨーロッパやアメリカへ行って絶対そういうことはありません。子どもは立て、半人足だ、おまえはすわる権利はないぞと、いちいち理屈を言わなくてもやられる。実際的に脳がつくられている。そうやって子どもが育てられてきますと、子どもはやはりそれなりにある一つの意識をもつわけでありませう。

よくピクニックやなにかに行きますと、電車がくるまではちゃんと並んでいるけれども、からの電車が入ってくると、その列が乱れてしまって、押し返しへし返す。たいへんなみつももないかっこうをするわけです。場合によっては子どもなんかは股ぐらなんか通っていく。おかあさんに教えられて、おまえは小さいからあのおじちゃんの股ぐらの下を歩いて、さきに席を取っておいてなんて言われて、人をけとばすことを五つ六つのときから教えられているわけです。そうすると、子どもはするすると行って、「おかあちゃん、取ったよ」「ああよしよし」なんて、実にみつももないことをやっているわけです。だいたい日本の家庭というものはそういうことをくりかえしやっているわけです。学校で一年間に30時間かそこら社会のこととか愛国とかというようなことを教えたってとてもだめです。毎日毎日くりかえしてそういうことをやっている。そういうものの考え方で一つ一つの行動が行なわれているということが多分にあるわけです。自分の家の庭で小便したら、おやじにおこられるでしょう。そんな所でするな、表へ行ってしてこい、なんていう親がたくさんいるわけです。道路をよごすことはいっこう平気だけれども、庭へごみを捨てたり畳の上へ捨てたらおこるでしょう。そんな所へ捨てないで道路へ捨てるなんていうのがたくさんいる。毎日毎日そうやられていれば、社会というものはそういうふうにしてよごしてもかまわぬものだというくせが脳についてしまう。

だいたいいま日本の子どもがもっている意識というものは、そういうふうにして育てられたものです。結果だけをごらんにならないで、いかにしてそういうふう育てられてきたかというプロセスをごらんになれば、みなおとなが教えてくりかえしくりかえし習慣的にそういうふうになってきている。しかし、子どものころからよく育ててくれば、今度は子どもが、おとうさん、日本の社会ってふんい気悪いな、これじゃだめだな、というようなことになる。それは自分が正しいいいことを育てられてきたという意識がどこかでやはりある。自分のやってきたことは、やっていることは、いいことだと思ってやっているという自覚がある。肯定されてやっている。反対に、席を取るばかりやっているのは、やはりそれがいいことだと思ってやっている。

道徳教育にも、またそういう教育らしいプログラムというものをつくっていただきたい。それはどういうプログラムかといえば、家庭から始まったそういう行動のプログラムがあるはずである。親と子どもがいっしょに出るときにはどういう行動をしなければならないか、子どもが町を歩くときはどうしなければならないか、というようなことは徹底的に訓練する。地域社会が一体になってそういうふうなものをつくって、おとなの社会がおのずから態勢を立て直して、そして

子どもに向かうということであれば、子どもの道徳心などというものはつちかわれていくはずがない。道徳教育などというものは、そういう意味では最も基本的な人間教育の本質をついているものだと思ふ。まずみずからが正されなければ、子どもは正されないということをあらわしている。しかもそれは実践においてなりたつんだということをちゃんと示している。

そういうことがなければ本質的な道徳教育というものはできないでしょう。ごまかしであるならば、それ自身が道徳ではないわけです。いまのおとなのやる道徳教育はとかくごまかしが多いんじゃないか。自分があやしげなことをやっていて、子どもには見せないようにしようなどということは、おかしいことである。ほんとうに人間を、心の底から大脳が正しいことを実践し、正しくものを考えるようにするのなら、環境からなにかを変えてかからなければいけない。しかも、それを根気よくくりかえし行動できるように、大脳みずから考えることができるように努力しなければならぬ。これが道徳教育の基本のありかたではないでしょうか。

私は、そういう意味で、最近の人間科学が生み出したものの考え方というものは、やはり道徳教育にも適用できると思われる。適用できるじゃない、人間科学というものは、やはり、人間の真実というものを一步一步つきつめていって、正しいものをだんだん明らかにしてきている。そういうことをわれわれは土台にして、教育というものをもういっぺん考え直さなければいけないんじゃないか。われわれの頭の中にはいっているものの考え方というものが、やはり古い時代の非常に未熟なものの考え方で、そのことがわれわれの習慣となって、それを正しいと信じております。その習慣を打破してみる必要があるんじゃないか。われわれのものの考え方のなかには、習慣なるがゆえに正しいと信じられているものが相当たくさんある。教育においては特にそういうことが多いと思うのです。もう一度そういうものにメスを入れてみる必要があるのではないかと。そういう意味で、私は教育観というものを一度考え直してみることが必要であるというように最近考えているわけでありませう。